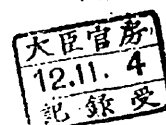


副官

社會記事資料（其ノ七四） 一一ノ二后 海軍軍事普及部報道班

一支那避難民に瀧ぐ武士の涙一

家を焼かれ財を失ひ戦火の上海に僅かに生命の安全のみを求めて右往左往する支那避難民の、その最後を守るもの「生命」すらが鬼畜の如き支那軍の機關銃口におのゝくのだ、それを溫い心を以て庇つてやり自身の危険など二の次にして安全地帯へ導いてやるのが、實に日本軍なのだ、暴虐南京政府とその軍隊をこそ敵とすれ、支那民衆は一視同仁、東亞の盟主の力強い羽交ひの下に抱きしめてやるべきむしろ氣の毒な存在であるとの心構へは皇軍將兵の末の末に至るまでが持合せてあるもの、百の宣傳千のデマも事實の前には何と無力であること――以下は上海の前線にあつた我が陸戦隊の勇士等が名譽の戦傷を療養し



つゝある病院よりの報告の一端、便りの序でに洩らして來たそれ等避難民救護の記、抜き書ではあるが我が將兵の眞實が如何に戰禍の地に美しい人情の花を咲かせてゐるか、窺へるだらう。

△

△

△

△

二等兵曹

飯島

重

狙撃砲彈が落下するので時に〇〇本部を變更せねばならない、三回目に變更した時だ、その部落に主人に置去られた支那人ボーイが四名、女が三名（その中の妙齡の美人二名は金で買はれた妾だといふ）子供が三名居つた、副官は自動車で佛租界方面に連れ行けといふ命令、そして食物が無いならパンでも呉れてやれとのお言葉であつた、あの生々しい通州事件を思ひ出した、日本人は幼兒迄も皆殺しにしろと叫ぶ

支那軍、その關係を思ひ感慨深いものがあつた。やがて用意された
自動車で充分なるパンを與へて夕闇迫る死の街に進む車を附近の者
一様に無事で行けよと瞳に物語らせてゐた。

△ △ △ △

一等水兵 神山 恒男

私達は共同租界の避難民整理及び便衣隊狩をしてゐました、一日、幾萬人といふ避難民が私達の警備してゐる所を通りますが實に悲惨なものです。一老人が泣きながら左足を血で眞赤になつて漸く歩いて来る。その老人をつれて來て義勇隊の人に通譯して貰ひ懇くと「支那兵にやられた」とオロオロしてゐる、あまり可哀想ですから支那人の避難トラツクを止めて乗せてやりましたが、その支那人はとても喜んで「多謝々々」と禮を云つてゐる。周囲の人達も喜んでをりました、私達は避難民に對してはやさしくしてやります。各國の外人にも特に優しくしてやりますので上海の外人はとも陸戦隊に好意を持つて居ります、或は米國人と思ひますが私達の警備

してゐる近くに大きな青物市がありまして其處から持つて来てくれたと思ひますが、バナ、を澤山持つて来て子供の云ふやうな日本語で「御苦勞さま」と言つて置いて行きました。その時は私達は幾度も禮を云ひましたがまた何となく心強く感じました。

△

△

△

△

二等水兵

須之内

健

東部小學校華盛路の十字路を守つてゐる時のことなり、この學校の中に數百人の支那人避難民が隠れて居つた。若しその中に便衣隊がゐては危険と思ひ此等の避難民を親切にいたはり安全地帯へ移動せしめた。すると二町位彼等を行つた。するとある家より支那兵が盛に自分の國の避難民を射撃するではないか、鬼と云つてよいか、馬鹿者と云つてよいか、我等には考

へもつきませんでした。彈丸に當つて血だらけになつて泣き泣き手を合せながら又日本兵士の方へ逃げて來る。今度はなかなか我々の方より離れない。實にどうしてよいか判らなくなつた事があつた。今度は注意に注意をいたし味方の陣地から陣地へと安全地帯を逃してやつた。有難う有難うと手を合せて日本軍人の親切をして正義の戦ひに感激しながら涙を流して別れた。これが反對に支那兵であつたら如何なる事をするかと後で考へずには居れなかつた。